

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3670号 2017.5.24 発行

あなたの地域にも…ぜひ連絡を 認知症 5 団体が全国の拠点地図



産経新聞 2017年5月24日
認知症にかかわる国内の当事者5団体の代表らが集まったセッション＝4月27日、国立京都国際会館（寺口純平撮影）

国立京都国際会館（京都市左京区）で4月に開かれた「第32回国際アルツハイマー病協会国際会議」で、認知症に関わる国内の当事者組織5団体が、各都道府県にある拠点を記した日本地図を発表した。各団体は「同じ立場の人とつながることで、希望がみえることもある。

困っている人は、どこかの団体に連絡してほしい」と呼びかけている。（加納裕子）

- ★全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会
☎ 03・5919・4186(月・水・金の日中)
- 男性介護者と支援者の全国ネットワーク
☎・FAX 075・466・3306
- ▲日本認知症ワーキンググループ
✉ contact@jdwg.org
- レビー小体型認知症サポートネットワーク
サイト dlbsn.org
- 公益社団法人 認知症の人と家族の会
☎ 075・811・8195

認知症に関わる 5団体の全国配置

※国際会議資料を基に作成
(平成29年4月現在)

										北海道	
										青森	岩手
					福井	石川	新潟	秋田	山形		
山口	島根	鳥取	兵庫	京都	滋賀	富山	群馬	栃木	宮城		
長崎	佐賀	福岡	広島	岡山	大阪	奈良	岐阜	長野	埼玉	茨城	福島
		熊本	大分	愛媛	香川	和歌山	三重	愛知	山梨	東京	千葉
沖縄	鹿児島	宮崎	高知	徳島			静岡	神奈川			

スタートラインに

5団体は、認知症の人と家族の会▽レビー小体型認知症サポートネットワーク▽男性介護者と支援者の全国ネットワーク▽全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会▽日本認知症ワーキンググループ。地図を見れば、すべての都道府県にいずれかの団体の拠点があることが一目で分かる。

国際会議では4月27日、5団体の代表がセッションを開き、それぞれの活動を紹介した。会場の男性から「5団体が連携し、国家的な政策をまとめられないか」との声が上がると、「全国若年認知症」の代表者が「5団体が集まれば、法整備など何かできるかもしれない」と話し、「レビー」の代表者は「集まったことがスタートライン」と強調。今後とも連携して法整備などを求めることを確認した。

会の特徴さまざま

昭和55年結成の「認知症の人と家族の会」（本部、京都市）は全都道府県に支部を持ち、会員数約1万1千人の公益社団法人。各地で開く家族や本人同士の交流会や会報の発行、電話相談を活動の柱とし、政策提言なども行う。今回の国際会議では、日本での主催団体として支えた。

「レビー小体型認知症サポートネットワーク」は平成20年に発足し、全国18エリアで展開。レビー小体型は認知症の約20%を占め、患者数は50万人と推計される。物忘れ以外に、幻視や筋肉のこわばりといった全身症状が起こるのが特徴。ケアや医療の専門家が交流会などを主催し、介護家族をサポートする。

介護と仕事の両立に悩んだり、社会から孤立したりしやすい男性を支えるのが「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」。21年に活動を開始し、会員は約700人。28年版高齢社会白書によると、同居している主な介護者のうち約3割が男性となっている。また、65歳未満の若年性認知症に特化した組織が、22年から活動する「全国若年認知症家族会・支援者連絡協議会」。厚生労働省が18～20年に行った調査では、若年性認知症の人は全国に約3万7800人と推計されている。連絡協議会には19都道府県で活動する37の団体が加盟し、若年性特有の課題解決をめざす。

最も新しいのが、認知症の本人らが26年に結成した「日本認知症ワーキンググループ」。全国の約30人が参加し、勉強会や、認知症になってからも希望と尊厳をもって暮らすための提言活動を続けている。

5団体は、今後は年に1回程度、共同イベントを開いていくという。

【この本おもしろっ】子供が飛びつく“うんこドリル”、楽しく漢字のベン強一社員は「嫌がられるのでは」と半信半疑も100万部超え

産経新聞 2017年5月24日

日本一楽しい漢字ドリルとして話題になっている「うんこかん字ドリル」＝神戸市東灘区（彦野公太郎撮影）



ひたすら同じ字を書き続ける漢字学習を嫌がる子供も進んで取り組むドリルがある。その名も『うんこ漢字ドリル』（小学1、2年生向けは『かん字ドリル』）。タイトル通り、問題の全例文に「うんこ」が盛り込まれ、漢字を書き込むマス目もうんこの形状をしている徹底ぶり。敬遠する保護者も多いのかと思いきや、販売部数を爆発的に伸ばしているという。ドリルの企画者は「教育をエンターテインメントにしたい」といたって真面目。一体どんなドリルなのか。（木ノ下めぐみ）

うんこだらけ…母は買うのに躊躇

「お勉強がクソ楽しくなる!」。そんなキャッチフレーズがでかでかと掲げられた書店の平台に1年生から6年生までのうんこ漢字ドリルがずらりと並ぶ。ページを開くと、見事にすべての例文に「うんこ」のフレーズが。例えば3年生で習う「根」の例文では《きみが球口（こん）だと思っとうめているものは、ぼくのうんこだ。》、4年

生で習う「書」は《小さく「うんこ」とだけ書かれた□（しょ）類が届いた。》といった具合だ。



6歳の長女にドリルを購入した大阪市中央区の女性会



社員（32）は「子供、特に女の子が排泄物を連呼するのは下品。ほんの一瞬、買うのをためらった」と苦笑する。長女は『『ベッドの左□（ゆう）にうんこをおいてねよう』だって。おかしいね』と破顔して例文を大声で読みあげるので「はらはらした」が、何度も「右」という漢字を根気強く書き込み、集中力が持続したと感じたそう。女性は「こんなにやる気が出るなら買ってよかった。“うん”と頑張ってるほしい」。

社内で飛び交う“うんこ” 異例ベストセラーに

発行元の文響社（東京都）によると、ドリルは同社が初めて手掛けた学習参考書。3月下旬に発売し、約1カ月半で106万8千部も刊行するベストセラーに。「学習参考書の分野では全学年の同一シリーズで発行部数が20万部を超えれば人気商品といえる」（担当者）というだけに、その人気ぶりがうかがえる。

それでも売り込みをかけた当初は、「面白いけど親は嫌がるのでは」と書店員の反応は今ひとつ。社員も半信半疑だった。ところが、発売開始直後からツイッター上などで「息子の笑いが止まらない」と喜ぶ保護者の声などが次々投稿され、売り切れる店が続出する事態となった。

子供の頃、勉強嫌いだっただけの経験から「教育をエンターテインメントにしたい」と願っていた山本周嗣社長が自ら立案、2年間温めてきた肝いりの企画。制作過程では「うんこ」という単語が社内で飛び交い、「メールでも『うんこ校正の件』なんてあり得ない件名がごく当たり前に送られ、恥じらいもなくなった」と編集担当者の谷綾子さんは笑うが、ドリルの内容は真剣そのものだ。

一見ふざけているかのような例文も、記憶に残りやすいようにという心配りから。新学習指導要領にも対応しており、登場する漢字の並びは関連する字を集めている。マス目の形がうんこ型だったり、よく見ると表紙の題字も、「うんこの形状を再現するべく、絞り出したような角（つ）がついています」（谷さん）。うんこの形をモチーフにしたマスコットキャラクター「うんこ博士」が表紙を飾り、時にはページの隅で漢字を覚えやすいよう、うんこを絡めた絶妙な助言もする。

さらに試作段階では、ドリルの形までうんこ型にする案があったが、「書きにくいから」と最終的には却下になったのだとか。

大人も子供もひきつける「魔法の言葉」

1～6年生で習う漢字は1006文字で、例文は3018個。その全てをたった1人で考案したのが『温厚な上司の怒らせ方』などの作品がある映像監督、古屋雄作さん（40）。

古屋さんによると、「うんこは童心の象徴。いつしか人は『うんこ』で笑わなくなる」が、古屋さんはそういう笑いがいままなお好きで、10年以上にわたり、ライフワークとして四・四・五の定型で「うんこ」を盛り込んだ「うんこ川柳」を作っていたというから、ぴったりの人選だった。

「子供にとって『うんこ』は笑いの原点。子供の頃だけの特別な親友とまでいっても過言ではない」とまで力説する古屋さんでも、これだけの例文作りにはさすがに苦戦。「食べたり臭ったりするような生理的に受け付けない使い方は避け、子供を飽きさせないように、うんこが色々な角度から登場するよう心がけた」と細心の注意を払った。

一見、結びつかないような漢字やシチュエーションにうんこが登場する落差が笑いのポイントで、古屋さんのお気に入りの例文は小学5年生の「演」で、《天才俳優がうんこの役を熱□（えん）する》だそうだ。

とはいえ、大人も子供もひきつけてやまない魔法の言葉であったとしても、嫌がる人はもちろんいる。ドリルの末尾には文響社からのお願いとして「漢字学習にユーモアを取り入れ、学習意欲向上に役立つ目的」で作られ、「例文にあるような行動をマネしないように」と一文が添えられている。古屋さんも「いくら楽しくても、うんこを嫌がる人は必ずいることを忘れないで」と呼びかけている。

精神疾患治療法、スポーツの成績向上に応用…桐生第一高校 読売新聞 2017年5月24日

精神疾患の治療法として注目される認知行動療法を、スポーツの成績向上に生かす試みが始まった。選手たちの心理的負担や過剰な不安を軽減し、持てる力を十分に発揮できるようにする。先駆的に導入し、成果をあげる桐生第一高校（群馬県桐生市）の取り組みを紹介する。（佐藤光展）

不安症などに効果

認知行動療法は、過剰なストレスを招く考え方のクセに気づき、視野を広げて多様な見方ができるようにする方法。嫌なことがあった時、その状況や自然に頭に浮かんだ考えの根拠、別の見方などを所定の様式に沿って順に書き出す「コラム法」（認知再構成法）や、直面した問題を解決するための考え方などを習得する。うつ病や不安症などで治療効果が示され、近年、国内でも普及してきた。

同療法には、日常的に生じる気分の落ち込みや不安を軽減する効果もあるため、簡略化した方法を健康な人にも行う動きがある。この利点をスポーツの分野でも生かそうと、いち早く動いたのが、19

99年の夏の甲子園で野球部が優勝した桐生第一高校だった。

一時は低迷した時期もあった野球部などの実力アップを目指し、同校の校医で精神科医の関崎亮さんが導入を計画。養護教諭の高野千枝子さんらが、東京で認知行動療法の講習を受けるなどして基本的な技術を学び、導入に備えた。

「強気に押せた」

まずは2014年に、進学スポーツコースの1年生のうち40人に試験的に実施した。授業のうち3時間を使い、高野さんらがグループワークなどを交えて、コラム法などを解説した。更に、簡易版の同療法を体験できるサイト「こころのスキルアップ・トレーニング」と連携し、スマートフォンで日々の悩みなどを書き込める同校の専用ページを開設。生徒たちは家庭などでコラム法に取り組んだ。

1か月後、同療法に取り組んだ生徒のストレス度を自己記入式のチェックリストで確認すると、実施前よりも顕著に下がっていた。一方、取り組まなかった同コースの1年生はストレス度が上昇していた。関崎さんは「思春期はストレスが増える時期。それが驚くほど下がり、効果の大きさを実感した」と話す。

同療法を体験した生徒たちが中心メンバーとなった野球部は、16年春に甲子園出場を果たし、以後のチームも県内有数の実力を維持。現在3年生の投手は「試合中に不安で崩



れそうになった時、考え方を切り替えて強気で押せるようになった」と言う。その結果、四球を連発して崩れることがなくなり、安定感が増した。

野球部長の 桑原 孝規さんは「試合に出る機会が少なく、悩んでいたキャプテンが、コラム法に取り組んで自分の役割に気付き、チームのまとまりがすごく良くなったこともある。監督に怒られても力に変えられる生徒が増えた」と話す。

同校では現在、進学スポーツコースの生徒全員に認知行動療法を指導し、定期的な講習を続けている。

認知行動療法の第一人者で精神科医の大野裕さんは「現実に冷静に目を向けることで実力が発揮できる。たとえ勝てなくても、多感な時期に視野を広げる方法を学ぶことは今後の人生に役立つ。多くの学校で取り入れてほしい」と話す。

刑法改正案 性犯罪被害者が成立を訴え

NHK ニュース 2017年5月24日

今の国会に提出されている性犯罪の刑罰の引き上げなどを盛り込んだ刑法の改正案めぐり、被害者の女性たちが集会を開き、国会で早急に審議を始め、来月18日までの会期内に確実に成立させるよう訴えました。

刑法の改正案には強姦罪の刑の下限を引き上げることなどが盛り込まれていますが、国会では「共謀罪」の構成要件を改めて「テロ等準備罪」を新設する法案の審議が先に行われました。

自民・公明両党は、来月18日までの今の国会の会期内に刑法の改正案などの成立を目指すことを確認していますが、審議はまだ始まっていません。

こうした中、性犯罪の被害者や支援者などで作る団体が都内で集会を開き、国会で早急に審議を始め、会期内に確実に成立させるよう訴えました。

この中で、性暴力の被害者の山本潤さんは「私たちの権利が、なぜこれほど長い間、改正されずに無視されてきたのかと疑問に思います。今の国会で必ず刑法改正を実現してほしいと思っています」と訴えました。

未来の技術 知ることの意味



NHK ニュース 2017年5月24日

休日に近未来を描いたSF映画をレンタルで借りてきて、スナック菓子片手に鑑賞する。楽しいひとときですが、将来の技術・テクノロジーが私たちの生活をどのように変えるのか、改めて考えたことはありますか？

こんな疑問に答えようとイギリスの雑誌「エコノミスト」が「2050年の技術」という本を出版しました。著名な科学者やエコノミスト、作家など専門家がそれぞれの分野を執筆するというスタイル。本を取りまとめた

たエコノミスト誌の編集局長、ダニエル・フランクリンさんが来日した際に話を聞きました。（おはよう日本おはBizキャスター・豊永博隆）

一流誌がまとめた未来の技術

エコノミスト誌は世界各国の政治家や政府高官、グローバルビジネスに携わる人々が愛読する雑誌です。フランクリンさんは1983年にエコノミスト誌で仕事を始めます。旧ソビエトや東欧の取材を担当し、その後、1993年から4年間、ワシントン支局長を務め、クリントン政権時代のアメリカを取材。ロンドンに戻ってからは、世界の政治経済に関する調査部門の論説委員などを歴任してきました。

フランクリンさんが取りまとめた「2050年の技術」。テクノロジーが経済の生産性に

及ぼす影響、医療や食料、エネルギー、そして、教育までを、どう変えていくのかなど、さまざまな面から未来を予測します。

テクノロジー予測の重要性



なぜ未来のテクノロジーを予測することが大事なのか。フランクリンさんはこう語ります。

「私が注目した理由は、テクノロジーが間違いなくあらゆるものに影響を及ぼすからです。実際、テクノロジーはビジネスのあらゆる側面に入り込んでいます。もちろん2050年に何が起きるかは分かりません。ですから謙虚でなければならない。しかし、**長期的に状況を眺め、今後の世界情勢や未来の技術**

術を推し進める、根底にある力を知ろうと努力することで、未来に向けてよりよい準備を始めることができるのです」

日本の女子高生が世界を先取り？

では、どうやったら未来のテクノロジーを予測することができるのか。

私たちはある日、新製品が発表され、「こんなことができるようになったんだ！」と驚くときがあります。しかし、こうした新製品や新技術は突然登場するわけではないとフランクリンさんは言います。

この本の中で、時代を読むコツとして勧められているのが「**エッジケース（限界的事例）**」と呼ぶ事例を見つけ出すことです。エッジケースとはものごとが広く普及する前に特定の**集団や国でだけ広がった事例のこと**です。

そのいい例が2000年代前半の日本の携帯電話、ガラケーの使い方だと言います。今のスマホ全盛の時代を予見できる事象として、日本のガラケーの使い方、特に日本の女子高生の動向に海外からは注目が集まっていたというのです。

「日本の女子高生は熱心な『ケータイ』ユーザーでした。女子高生がテクノロジーをどう利用しているか、当時から注目されていた。アメリカのテクノロジー雑誌WIREDが『女子高生ウォッチ』というコラムを掲載していたほどです」

フランクリンさんはこう説明しました。

AIは人間の仕事を奪う？

AI＝人工知能はここ数年で急速に進化しています。映画「ターミネーター」を思い出すまでもなく、コンピューターがいつか人間の知性を超えてしまうのではないかと。人間の仕事を奪って人類を支配してしまうのではないかと。そんな心配をする人は少なくないと思います。

こうした心配について、フランクリンさんは

「一般論では機械の台頭によって仕事の在り方や、仕事の種類が代わることは非常に現実的な懸念だと思います」と述べる一方で「仕事を維持するためには、新しい世の中に順応するための柔軟性が大事です。新しいスキル・技能を身につける、もしくは学ぶ準備があるかどうかの方が大事で、それがあれば労働市場が変化しても働く場はあるでしょう」と前向きにとらえていたのが印象的でした。

「ターミネーター」のようにAIや機械が暴走することはないのか？

こうした事態を防ぐためにフランクリンさんは「機械はどんなことができるかをまず人



間が理解し、どんなものを生み出すのか、ある程度の情報開示が必要だと思います。そして、本当の情報を得るために、機械を稼働させる方法について、何らかの規制が必要なのだと思います」と語っていました。

規制はテクノロジーの進化に追いつけるか

果たして規制はうまくかけられるのでしょうか。ここに私は疑問を感じ、フランクリンさんにこんな質問を投げかけました。

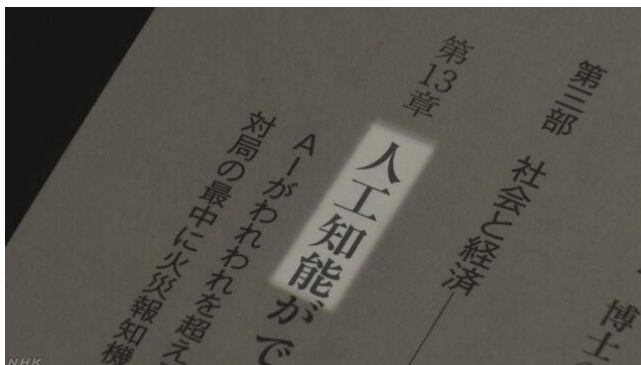
「政府はテクノロジーの進化をどう規制するのでしょうか？この問題について、政府や政治は国内的に見がちですが、テクノロジーはグローバルに進んでしまいがちではないですか？」

フランクリンさんはこの質問に対して以下のように答えました。

「そこが複雑さを増している点です。規制については国際的な枠組みが必要ですが、それには時間がかかります。動きがゆっくりなので、枠組みができあがるまでテクノロジーは待ってくれないのです。政府がテクノロジーの創造的な側面を抑えつけることなく、変化についていくことは相当大変なことなのです」

この言葉の意味は重いと私は感じました。なぜなら当局の規制とテクノロジーの進歩は裏腹の関係にあり、規制が厳しすぎるとイノベーションを妨げてしまうおそれがあるからです。医療やバイオテクノロジー、エネルギー開発からインターネットの音楽配信など、過去、規制や強すぎる権利保護が壁になった例がいくつもあります。

バランスをとりながら急速に進化するAIに適度な規制を適用していく。世界がこれから直面する大きな課題かもしれません。



過去の成功体験に居座ってはダメ

最後に日本のテクノロジーの未来について尋ねました。

「日本は人口が減少し、高齢化が進みます。そのときテクノロジーが多くの方法で社会を支え、労働力のギャップを埋め、高齢者を支えることに役立つでしょう」「日本は（テクノロジーの面で）非常に強力な国で、研究開発に大きな強みがあります。しかし、競

争が激しさを増す世界にも直面しています。隣国の中国はますます力を増し、このほかにも新興の技術大国がのしあがってきます」

「日本は日本以外で開発された新しい技術にもオープンであり、これまで築き上げた方法を変える備えが必要です。これは簡単ではなく、勇気がいることです。ただ、過去の成功モデルに居座り続けてしまうのは危ういことです」

次世代の技術を予測するためにエッジケース（限界的事例）をいち早く見つけ出し、変化には柔軟に対応していくことがいかに大事なことなのかをインタビューを通じて実感しました。

未成年の投稿、AI判別...ネット犯罪防止に期待

読売新聞 2017年05月24日

インターネットの書き込みを人工知能(AI)が分析して、未成年の投稿かどうかを判

別する技術を、東京大とIT企業「サイバーエージェント」の研究チームが開発した。

未成年がネットで犯罪やトラブルに巻き込まれるのを防ぐ効果などが期待される。名古屋市中で開会中の人工知能学会で24日、発表した。

チームは、同社の子会社が運営する交流サイトの投稿1000万件を使い、内容と投稿者の年齢をAIに学習させた。その結果、AIは、未成年の投稿を90%の確率で判別できるようになった。未成年は「宿題」などの単語を使って学校生活や部活動について書き込むことが多い傾向があり、AIはそれらの単語を基に年齢層を分類しているという。

社説：小粒で先送りが多い規制改革答申を憂う 日本経済新聞 2017年5月24日

規制改革は企業による新たな商品やサービスの供給を後押しし、技術革新を通じて生産性を高める。成長戦略でもっとも大事な政策のひとつである。

残念ながら規制改革推進会議がまとめた今年の答申は小粒で、懸案の先送りがめだつ。政府は規制改革の推進体制も立て直す時だ。

介護の分野では、介護保険サービスと保険外のサービスを組み合わせる「混合介護」というやり方がある。

現在でも制度上は認められているが、厚生労働省が保険サービスと保険外サービスの明確な区分を求めているため、事業者が柔軟なサービスを提供できずにいる。

答申は自治体や事業者向けのわかりやすい通知（技術的助言）を出す方針を示した。ただ、その内容は「現行ルールの整理について検討し、結論を得る」と事実上先送りしているうえ、実施時期も「2018年度上期中に速やかに措置」とスピード感を欠く。

事業者の創意工夫で多様なサービスが生まれれば、収益機会が増えて介護人材の処遇も改善しやすくなる。そんな混合介護の効果の大きさからすると、答申の内容は期待外れというほかない。

混合介護をめぐるのは「高所得者ばかりが恩恵を受ける」という厚労省や与党内の慎重論があったが、その壁を破れないところに事態の深刻さがある。

民間の有識者が大胆な提言をぶつけ、最後は閣僚も交えた交渉で政治決着を図る。そんな医療や雇用の「岩盤規制」改革でみられた場面は今回なかった。

答申は、行政手続きコストの2割削減、人手不足が目立つ労働基準監督署の一部業務の民間委託も盛った。地味だが成果である。

しかし、一般のドライバーが自家用車で利用客を送迎するライドシェア（相乗り）については今後認める範囲を通達で明確にする方針にとどめた。改革の入り口にたっても、そこから大きく突破できずにいるのが現状ではないか。

全体として、規制官庁と規制改革推進会議の事務局が合意できる範囲で小さな案を重ねた「官僚主導」の印象は否めない。

地域限定で規制改革をする国家戦略特区でも、ライドシェアや漁業生産組合の特例など、用意したメニューの実績がゼロという例が判明した。規制の本質は細部に宿る。政府には改革の徹底とそのため体制整備を厳しく求めたい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行